

古典を速く正確に解く方法

ポイント ①「問い」を利用して内容を推測する！

②「主語」「述語」「口語訳」を利用して文章を読む！

「問い」を利用して内容を推測するとは……

いきなり文章を読み始めるのではなく、問いから読む！

（例題）平成二十二年・埼玉県（前期入試）

問3 ②守いみじくほめて とありますが、「守」がほめた理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 侍がいつも誠実に仕事をしていたから。
イ 雪が降っている中でも、侍が掃除をしていたから。
ウ 守に与えられた題の通りの歌を侍がよんだから。
エ 侍が降り積もる雪の美しさを巧みによんだから。

設問に注目すると、「守」がほめた理由 とあります。よって、この文章は、「守」が誰か（何か）をほめる話であるということが推測できます。また、選択肢に注目すると、全ての選択肢に「侍が」とあります。つまり、

「守」が「侍」をほめる話 ということが推測できる！

このように、いきなり文章を読み始めるのではなく、問いを先に読むことで、内容が推測でき、速く正確に内容が理解できるのです！ 次ページの類題にチャレンジしよう。

(類題) 内容を推測してみよう！ 平成二十三年・埼玉県(後期入試)

問4 本文に書かれている内容について述べた文として適切なものを、次のア～エの中から二つ選び、その記号を書きなさい。

ア 春は霞のような細かい雨が降るが、夏は大粒の激しい雨が降る。

イ 春は雨だれが間隔をあけずに落ちるが、夏は雨だれが間隔をあけて落ちる。

ウ 春は雨が降っても鐘の音がかすかに響いてくるが、夏は激しい雨音で物音も聞こえない。

エ 春の雨は湿っていても心が澄みきった感じがするが、夏の雨は蒸し暑く不快な感じがする。

いかがですか？選択肢に注目すると、全ての選択肢に「春の雨」「夏の雨」とあります。よって、この文章は、

「春の雨」と「夏の雨」の比較 ということが推測できる！

過去問などを用いて繰り返し練習してみよう！

「主語」「述語」「口語訳」を利用して文章を読むとは……

人物を「○」で囲み、動作に線を引く！口語訳が付いているところは古典ではなく口語訳をそのまま読む！

二つ目のポイントは実際に作業をしながら文章を読み進めます。「誰が―どうした」という部分に注目するだけで、内容を正確に読みとることができます。また、埼玉県の入試問題は「口語訳」が付いています。難しい古典の文章でなく、口語訳を読みましょう。難しそうな古典も平易な内容に変わりますよ！次ページからの問題にチャレンジしよう。

(例題) 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(点線の左側は口語訳です)

※延喜の帝※神泉苑へ御幸なつて、池のみぎはに驚の①あたりけるを、
おでましになつて

※六位を召して、「あの驚取つて参れ。」と仰せければ、「いかでかこれを
お呼びになつて、おつしやつたので、どうしてこの驚を

取るべきや。」とは思ひけれども、綸言なれば歩みむかふ。驚は羽つくろひして
捕らえることができよう。天皇のお言葉ゆえ、羽を整えて

立たんとす。「宣旨ぞ、まかり立つな。」と言ひければ、驚ひらみて飛びさらず。
飛び立とうとする、天皇の命令である、平伏して

これをいだいて②参りたり。帝覧あつて、「なんじが、宣旨にしたがひて」
「覧あそばして、(驚である)おまえが、

参りたるこそ神妙なれ。」とて、やがて五位にぞなされける。
殊勝である!

(『平家物語』による)

(注) ※延喜の帝……醍醐天皇。

※神泉苑……代々の天皇が遊覧された庭園。

※六位……六位の身分の者。

問1 ①あたりける とありますが、この部分を「現代かなづかい」に直し、ひらがなで
書きなさい。

問2 ②参りたり とありますが、この主語を、次のア～エの中から一つ選び、その記号
を書きなさい。

- ア 帝
- イ 驚
- ウ 六位
- エ 五位

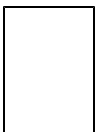
問3 本文の内容と違うものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 醍醐天皇は神泉苑におでましになったとき、池のほとりの鷺を捕らえてくるよう、六位の者に命じた。

イ 六位の者は鷺を捕らえることはできそうもないと思ったが、帝の命令なので鷺の方へ歩いていった。

ウ 六位の者が鷺に向かって「帝の命令である、飛び立つな。」と言ったところ、鷺は本当に飛び去らなかった。

エ 醍醐天皇は、六位の者が命令に従ったことに感激し、この者を六位の位から五位の位にした。



最初に「問い」を読んで内容を推測する。「人物」を○で囲み、「動作」に線を引く、「口語訳」を利用して文章を読んでいこう！次のページの解答と口語訳で復習しよう。

(例題) 解答

問 1 いたりける

問 2 ウ

問 3 エ

《口語訳》

醍醐天皇が神泉苑へおでましになって、池のほとりに鷺がいたのを、六位をお呼びになつて、「あの鷺を取つてまいれ」とおっしゃったので、「どうしてこの鷺を捕らえることができるか」と思つたけれども、帝のお言葉ゆえ歩いてそちらへ向かつた。鷺は羽をととのえて飛び立とうとする。「帝の命令である、飛び立つな」と言つたところ、鷺は平伏して飛び去らなかつた。(六位は)この鷺を抱いて帝のもとへ、参つた。帝はご覧遊ばして、「(鷺である)おまえが帝の命令に従つて参上するのは殊勝である」と言つて、すぐに(六位を)五位になされた。